令和６年度　東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和６年５月　第２号

校長　阿久津　光生
〒114-0002
東京都北区王子 5-2-8
Tel 03-3911-8817

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標　自ら学び　自ら考え　自ら行動できる生徒

《令和６年度 第 71 回入学式を挙行いたしました》

４月９日、52 名の新入生を迎え、第 71 回入学式を挙行いたしました。阿久津の式辞の一部を掲載いたします。

「～（略）～本校では、今年度から「アントレプレナーシップ」を育む教育に取り組みます。アントレプレナーシップとは、元来は起業家精神のことや、起業家的資質や行動能力のことを意味する言葉です。しかしこの概念は、単にビジネスの場でのみ使用されるものではありません。凄まじいスピードで変わっていく現代社会の中では、自らがどのように生きるかを考えて、そのために必要な物事を実行する力を習得することが、これまで以上に求められています。つまりアントレプレナーシップ教育とは、自ら課題を見つけて、課題解決に向かってチャレンジしたり、他者と協力しながら解決策を探求したりすることができる知識や能力、態度を身につけることに他ならないのです。

今年度から始めるこのアントレプレナーシップ教育ですが、実は本校では以前から既にこの学習を少しずつ進めており、体験を蓄積してきていました。例えば、現在の３年生が１年生の時に行った、富山県高岡市立福岡中学校のみなさんとのオンラインでの交流学習がそれにあたります。この交流学習では、福岡中学校がある富山県高岡市出身の科学者である高峰譲吉と、東京都北区に居を構えた実業家・渋沢栄一をテーマとして、お互いの学校がそれぞれの郷土の偉人を学んで、紹介し合いました。設立に関わった企業が 500 以上あると言われる渋沢栄一はもちろんですが、タカジアスターゼやアドレナリンの発見で知られる高峰譲吉も、自ら会社を設立してタカジアスターゼの独占販売権を確保する等、起業家精神に溢れた人物でした。そして、この両名こそ、自らがどのように生きるかを考えて、そのために必要な物事を実行する力が飛び抜けており、正にアントレプレナーシップに富んでいた人物だったと言えます。

また、このオンライン交流学習の縁によって、昨年度の９月には、石川県の金沢工業大学バイオ・化学部応用バイオ学科准教授相良純一先生と８名の大学生のみなさんが、現在の３年生のために理科の実験授業を行うべく、わざわざ金沢から来てくださいました。相良先生のご指導のもとで日夜研究を続けている金沢工業大学のみなさんには、丁寧でにこやかな中にも真剣さと情熱があり、自ら道を定めて学ぶ若者の清々しくて格好良い姿がそこにありました。３年生の先輩方は、金沢工業大学のみなさんから多くのアドバイスや支援を受けながら、見事に実験を成功させました。分かる喜びや発見する喜びを体感できただけでなく、中には、自分も今までにないものを「発明したい」「開発したい」という想いをもった先輩もいたようです。このように、課題解決に向かってチャレンジしたり、他者と協力しながら新しい価値を創造する力をみなさんが身に付けられるよう、堀船中の特色ある教育として、これからアントレプレナーシップについてより一層学んでいきたいと考えています。～（略）～」

《３組 対面式がおこなわれました》

１年生５名に２、３年生の先輩から歓迎の言葉が贈られました。１年生の２人は礼儀正しくあいさつをしてくれました。２、３年生はとても頼り甲斐があるので、１年生も安心して学校生活を送れると思います。３組のみなさんが大変立派な態度で式に臨んでくれたので、心温まる素敵な対面式となりました。

《３年生４名が海外派遣成果報告会をおこなってくれました》

昨年 11 月に、現在の３年生の西川さん、佐藤（有）さん、河野さん、鈴木（祐）さんの４名は、北区立中学校生徒海外派遣生として、アメリカ合衆国カリフォルニア州 ウォルナットクリーク市 のセブンヒルズスクールに行ってきました。アメリカの中学生との交流やホームスティを通し、滞在国の学校や家庭生活、自然や文化、風俗や習慣などに触れることができました。そして今年の２月にはアメリカの中学生が来日し、各ご家庭でのホームステイを引き受けてくださいました。４名の海外派遣生のみなさんの発表が大変素晴らしかったですね！本当にありがとうございました。

～津田梅子の生き方（12）～帰国・再度アメリカへ派遣～

帰国後、梅子は住居を麹町区二番町に移しました。
梅子は自宅に寄宿させるなど女学生への積極的援助を行い、華族女学校で勤務するかたわら 1894 年（明治 27 年）には明治女学院講師も務めました。
その頃、アナ・ハーツホンは、父ヘンリー・ハーツホンと一緒に来日しました。
来日の間にアナ・ハーツホンは梅子の父が開設に大きく貢献した普連土女学校で高等科生徒のために英文学を教えました。アナ・ハーツホンと梅子との間にはブリンマー時代の友情が復活したのです。1898(明治 31)年 5 月には、梅子は女子高等師範学校の（後の東京女子高等師範学校、現：お茶の水女子大学）教授を兼任することになりました。
その年、万国婦人クラブ連合大会のアリス・ブリード副会長が来日しました。来日の理由の一つに、この大会に日本からも女性の代表を派遣要請することでした。この要請に明治政府から選ばれたのが、ともに華族女学校に勤務する梅子と渡辺筆子の 2 人でした。そして、梅子はアメリカコロラド州の首都デンバーで開催される第 4 回万国婦人クラブ連合大会で、日本の女性を代表してスピーチをするよう依頼されたのです。2 人は、急遽、6 月 5 日、アメリカのタコマ行きの船で横浜を立ち、コロラド州デンバーに到着の翌日、梅子はおよそ 3000 人の前で挨拶を述べました。この挨拶の中で梅子は、「やがて日本女性に発展期が訪れ、東洋諸国の女性の良い助け手になる日が来るであろう」と語り、「女子教育が拡まり、女性の地位が高まるにつれて、全世界を通じて女性が奴隷的な屈従や人形のような盲従の状態から解き放たれ、真に対等の資格で男性のよき協力者となる時代がくるであろう」と流暢な英語で話しました。
デンバー会議の後、マサチューセッツ州のレンサムという避暑地でヘレンケラーにも出会うことができたのです。その後、梅子と筆子はイギリスの女性たちから招待を受けました。当時内閣総理大臣であった大隈重信の後押しもあり、予定を変更してイギリス視察研修が実現することになりました。しかし、渡辺筆子は病気を理由に断り、梅子 1 人でイギリスに旅立ちました。
梅子は、ロンドンに到着して、ケンブリッジ大学などを訪問しました。ケンブリッジ大学を後にしてからヨーク大主教からの祝福を受けると、女子のための初等、中等教育機関として由緒あるチェルトナム・レディーズ・カレッジに 10 日間滞在して視察しました。その後、ブリンマー時代の友人を訪ねてフランスのパリに行き、約 2 週間滞在し、再びイギリスに戻りオックスフォード大学へ向かい聴講生として文学や倫理学、歴史学を学びました。梅子は、講義に参加するだけなく、オックスフォードにあるすべての女子カレッジの校長と面接する機会を持ち、女子高等教育について意見交換を行ったりもしました。
ロンドンに戻ってからは、近代看護教育の母、看護師の祖とも呼ばれているナイチンゲールにも会うことができました。79 歳を迎えようとしていた病身のナイチンゲールも梅子の訪問を大変喜んでくれて、帰りにいただいた花束は、押し花となって 120 年以上の時を超えて、今も津田塾大学津田梅子資料室に残されています。

ナイチンゲールからいただいた花の押し花
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子は，イギリスを発ち、アメリカ経由で帰国の途に着きました。

参考文献:高橋裕子『津田梅子―女子教育を拓く』　岩波ジュニア新書　2022 年 150 頁～172 頁